

シリアにおけるODA技術協力を視察して ～地域に根ざした障害者リハビリテーション(CBR)推進事業～

第一特別調査室 とみなが 富永 ふみあき 文朗

参議院ODA調査(アフリカ・中東班)の予備調査班の一員としてシリアの首都ダマスカスの近郊で実施されている技術協力事業を2005年7月に視察する機会を得た。この事業の一層の進展を祈りつつ、その一端を報告する。

1. はじめに

ダマスカス南東郊のヒジャーネ村を活動の舞台の一つとして、国際協力機構(JICA)などの資金的、人的支援で行われている「地域に根ざした障害者リハビリテーション(CBR)推進事業」は、JICAの瀧本薫専門家が発起し、地域のシリア人ボランティアと青年海外協力隊員他の人々がこれを支えている。

地域のボランティアの人々には自分の仕事があるので、ボランティア活動は仕事終了後となる。予備調査班も現地時間午後6時過ぎに訪れた。午後6時といっても地理的(緯度が福岡市に近い)及び社会的(夕食は通常日本よりもだいぶ遅い)事情などもあり日本の感覚では午後4時頃の感じであった。ヒジャーネ村役場に村長(30代に見えた)と瀧本専門家、それにシリア人青年10人ほどに加えて日本人青年数人が待機していた。調査班から自己紹介をし、村長から挨拶があったが、これらを含め、JICAシリア事務所紹介のシリア人通訳に流ちょうにアラビア語と日本語との橋渡しをしてもらった。

2. CBRとは

次いで、瀧本専門家から「地域に根ざした障害者リハビリテーション(CBR)」について詳しい説明があった。その要点は次のとおりである。

(1) CBRは一言では「障害のある人が生まれ育つ地域で皆と同じく社会参加ができるように住みやすい地域にしていこう」とする取組であって、国連をはじめとする諸機関なかでもユネスコ、ユニセフ、WHO、ILO等の福祉部門で普遍的な概念となっている。

(2) Cは地域(Community)のC、Bは根ざす(Based)のB、Rはリハビリテーション(Rehabilitation)のRである。

(3) 特に専門のリハビリ施設が近くにない地域の場合、当該地域の人的物的資源を最大限に利用して地域自身がリハビリテーションを振興することによって、障害のある人の生活と社会参加とを支援し、それにより、当該地域社会全体の開発を促し、住みやすい社会を築く発想で約20年前に生まれた事業である。

3. みんな一緒に

説明が終って、「それでは外にどうぞ」と導かれ、役場の裏庭に移動した。テニスコート位の広さの庭が隣地から覗かれない高さの塀に囲まれている。塀際や庭のところどころに木々が植えられ、緑陰がある。子供たちがあちらこちらに散らばって活発に土遊びをしているように見えた。よく見ると、1グループ4～5人の少年少女からなるグループが幾つかあって、そのグループの一つ一つにシリア人青年が1～2名ついている。雑草とりをしているグループ、小型鍬やスコップなどの道具でうねをつくっているグループ、移植ゴテなどの道具を持って、うねにとうもろこしとキャベツらしい苗を植え付けるのに熱中しているグループ、植え付けられた苗に水をやっているグループなど各グループの児童も青年もにこにこ顔でワーワー、キャーキャーと歓声をあげながら晴天のもと、作業に従事していたのが印象的であった。庭の一部を農園に造成する作業の最中と見られた。

車椅子に腰掛けながら、身を乗り出して作業をしている児童や四点支柱の杖を用いている児童もいた。これらの少年少女に特に気を遣うという雰囲気がない。児童を介助している青年も必要以上の手助けはせずに、自発の行動を尊重しているように感じられた。車椅子に座った児童、杖を持つ児童も活発そのもの。「ノーマライゼーション(常態化)というんでしたか？」との質問に即座に「インクルージョン(包含、包摂)です」との答が返ってきた。身体などの不自由な人も包含して一緒に作業をすることで(ア)不自由な人は心身の健康が一層増進される、(イ)その家族は一定時間介護から解放され用事をする



ことができ、心身の清新が得られる、(ウ)身体などが自由な人は、共同作業によって自らの心身の健康を図る作業が同時に他者の心身の健康の増進につながることになる、(エ)地域社会も益することになるなど、とっさに考えただけでも、一挙両得にとどまらない三得、四得を超える利点があることが感じられた。庭の一隅では椅子に座った少年少女が絵の制作に熱中していた。色のついた紙を小さくちぎり、そのちぎった紙片をテーブル

上の大きな紙に貼り付けて絵を制作しようとするもので指を使う細かい作業であった。身体などの自由、不自由を忘れたかのように熱心に取り組む児童たちとこれを見守る青年たち。ちぎり絵の作品が村役場の壁面を飾ることになれば、役場来訪者も一つ二つ話がはずむことになると思わず考えていると、「C B Rを最初に理解してもらったのはなかなか骨が折れましたが、次第に理解してくれるようになりました」と瀧本専門家が静かに語った。

4. 住みやすさの改善

「マルハバ」「マルハバ」(アラビア語で「こんにちは」と声をかけて瀧本専門家が各グループを激励に歩く。元気よく返事や説明をする少年少女とアラビア語で会話する同専門家。日本とシリアとの友好を絵に描いたような光景である。「昨日到着したばかりで

す」と言われる邦人青年も青年海外協力隊の方も皆きびきびと応援している。

ひとしきりの交歓のあと、表の砂利道に出て歩き始め、個人宅をお訪ねする気配となった。車も人もあまり通行していない。砂利に難儀しながら、なんとか車椅子を押し進むボランティア。別の車椅子を押ししていたボランティアは石ころの中を押すのをあきらめ、児童を抱きかかえて進む。軽くなった車椅子を別のボランティアが押ししている。4～5分後、進んでいる砂利道から少し奥まったところに建っている家屋に向け左折。敷地に入るところに縁石様の高さ15センチメートルばかり、幅はあまりないように見えるコンクリート製の工作物が道路に並行に続いている。縁石とは異なるようだが、道路から敷地に入るにはこの工作物をまたぐ必要がある。青年にはなんでもないが、車椅子利用者や高齢者の通行にはやや不便な高さで見受けられた。

よく見ると、この工作物の一部をまたいでセメントでスロープが造られていた。幅は車椅子の通行に十分である。セメントの新しさから真新しいものであることが一目瞭然で車椅子を押ししてきたボランティアはこのスロープのおかげで、少し力を込めて押すだけで難なく敷地内に入ることができた。「このスロープは瀧本さんを中心とする皆さんが最近造ってくれました。おかげさまで車椅子の出し入れが一人ですることができるようになりました」との説明を受けた。

5 . 信頼と親しみ

中庭を通り、10畳くらいの部屋に上がらせてもらい、車座になって座談会が始まる。この家の婦人が問わず語りに語られた。「動作が不自由な我が子は、以前は私以外に世話をしてくれる人もなく、24時間付きっきりでいるのは大変でした」、「ここ1年以上になりましたが、日本の方を核とするシリア人・日本人混成の青年グループが村役場と協調して、絵を描いたり、戸外でゲームをしたり、土作業をしたりなど同世代の元気な子供たちといろいろな活動を通じて触れあう形で子供の世話を一定時間見てください。不意にではなく予め予定を立てて下さり、その約束が実行されます。私も買い物、親族とのつきあいなどの予定を立てることができるようになり、本当に助かります。さっきのスロープも本当に助かっています」、「子供はおかげさまで近くの学校に通えるようになりました。元気な友達と接触することができて、見違えてきました」

この婦人に紹介された少年が車座の中央部分に横たわり、足が不自由なその少年のお腹をボランティア邦人青年がずっとさすっていた。少年はすっかり身を任せており、気持ち良さそうにしていた。

日本の国旗も政府開発援助（ODA）を示すマークも身近に見られない。しかし、日本の青年の献身的で地道な努力によってシリアの人々の心のなかに日本人への信頼と親しみとがしっかりと根づいていると思われた。

後記 この事業は次のサイトでより詳細に知ることができる。http://www.geocities.jp/cbr_syria/muranikki。JICAシリア事務所の次のサイトにもこの事業が言及されている。<http://www.jicasr.org>。写真提供は高塚年明^{たかつかとしあき}首席調査員。